

---

# 天才と凡人と規格外

緋色

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天才と凡人と規格外

### 【Nコード】

N4206N

### 【作者名】

緋色

### 【あらすじ】

めだかボックス世界に主人公がDies iraeの藤井蓮の記憶と聖遺物と経験をもって転生するお話

**プロローグ「生徒会長・黒神めだか」(前書き)**

中二です(主に怒りの日成分)

主人公最強です(主に怒りの日成分)

文才ありません(主に作者の未熟)

ブローグ「生徒会長・黒神めだか」

『世界は平凡か？』

平凡、実にいい言葉じゃないか

『未来は退屈か？』

退屈でいいとも

『現実 is 適当か？』

適当に普通の日常を過ごして生きたい

「安心しろ、それでも生きるとは劇的だ！」

安心できる要素がねえぞ生徒会長

お前はどこの人類最強だよ。

それが新生徒会長・黒神めだかへのオレの第一印象だった、

はっきり言って『最悪』である。

Side 人吉善吉

「カツ！」

まったく相変わらずだなあいつは

言うこと全部自分中心でそれでいてまっすぐ

キライじゃねえさ、ああいうまっすぐさはな

だけど振り回される身にもなってみろってんだ！

地元のヤンキーたちには

『哀れなことだ、貴様らも元は品行方正な一学生だったに決まってる、それがなにか重大な理由があって人に迷惑をかけたくなってしまう後戻りができなくなっただけに違いない！』

と、真骨頂その1である『上から目線性善説』で理由付けしたあとに

『お前たちがこのままだったら、私泣いちゃう！』

と真骨頂その2である『ツンデレ』でヤンキーたちをとりこにして

『うむ！貴様らやればできるではないか！褒美に私が接吻してやる

っ！』

と真骨頂その3である『生き過ぎ愛情表現』は寸でのところで止めたが(当たり前前である)

まあそんな感じにてんやわんやに疾風怒濤に嵐のように、はたまた神であるかのように

黒神めだかは俺こと、人吉善吉のことを振り回してきたのである、まあキライじゃないんだけどな

「まったく、ヤレヤレだぜ・・・」

そんな風に自己論争をして独り言を呟いていると

「まったくだな」

独り言に返事が返ってきた

「へ？」

おれは驚きすぐさま振り返る  
なにせ気づくまではまったく気配を感じなかったのに気づいたとたんにその存在感が増して威圧に変わる寸前という凶悪なまでに強力な存在感に襲われたのだから

だが

「ん？どうした？」

その強大な存在感の持ち主をみて  
おれは息を呑む

ツヤのある黒い髪に吸い込まれそうな蒼い瞳  
色白で触れば壊れてしまいそうな肌

そしてなによりそれら全ての調和の仕方だった

俺はこんなにも”完成”された人間を

めだかちゃん以外に知らない――！

「？おい、どうした？」

不意に声かけられる

「！？あ、ああすまない、お前は・・・？」

と気づいたら一歩後ずさりそう聞いていた

「？俺の名前か？俺の名前は藤井蓮お前と同じ一年だよ人吉善吉」  
フジイレン

？

なんでこいつ俺の名前？

「ん？だって同級じゃねえか俺ら」

え？マジで！？

「つかモノローグを読むな」

「モノローグ言うな、世界が壊れるぞ」

おっと危ない

「藤井か、俺の事知ってるみたいだが自己紹介はさせてもらっぜ、俺の名前は人吉善吉ヒトヨシゼンキチだよろしくな、藤井」

「・・・蓮でいい、苗字で呼ばれるのにはなれてない」

すこし拗ねたような顔をして藤井・・・いや蓮か

蓮はいった

「そっか？なら蓮、俺のことも善吉でいいぞ」

自分が名前を読んでいるのに相手に呼ばれないのはいささかさびしいというものだ

「そっか、じゃ遠慮なくよろしくな善吉」

こうして俺たちは友達になったのだ

どこまでも普通な俺と

どこまでも普通であろうとする蓮

そんな歪な二人の出会いはこんな井戸端会議みたいだったんだ

「とっころでぞ、善吉」



「ん？なんだ、蓮」

「お前の名前って明らかにお人よしから」

「それ以上は言つな！」

「あ、そう・・・」

ちなみに藤井蓮

血液型はABである。

**プロローグ「生徒会長・黒神めだか」（後書き）**

藤井蓮の容姿は以上に美しいと作者は思うのです

だってさ黒髪で碧眼で色白っておまえ

ちなみに藤井蓮の血液型は知りません

が、めだかボックスは今のところ血液型はABしかないっぽいのでこうしました

ちなみに作者はAB型です（関係ねーよ）

## 第一話「黒神めだか・藤井蓮」

新生徒会長の演説の後

友達になつた人吉善吉と藤井蓮

そしていつもの通りに新生徒会長こと黒神めだかに善吉が拉致されて生徒会長で一悶着あり善吉は「いつも通り巻き込まれる流れだ・・・」と若干達観し第一号の投書である「三年の不良達が（以下略）に対し『生徒会執行』という絶対的かつ強力かつ絶対無比な権限を発動させようと意気揚々に剣道場に向かう黒神めだかと自虐的に苦笑気味に達観的にはたまた『どーせすぐ始末がつくだろっ』と樂觀的にとぼとぼついていく人吉善吉

そして

新生徒会長こと黒神めだかへの第一印象『最悪』の我らが主人公こと・・藤井蓮だが

彼はいま猛烈に悩んでいた

「どうするかなあ・・・」

彼が悩んでる原因それは

「マリイが見に行きたいと言ってるとはいえ、あまり関わりたくないもんなあ・・・生徒会」

そう

己が半身であり相棒であり、はたまた姉的存在でありながらも妹のよう  
で娘のような存在である。マルグリットの事だった

マルグリット・・・マリイ曰く

『面白そうだから見に行こう!』とのこと

ここで藤井蓮の心境はこうである

「どこで育て方間違えたのかな・・・」

転生当時は俺のことも藤井蓮のこともカリオストロのことも知らず  
機械的に俺に付き添う少女であり聖遺物というこの世界の異物であ  
った少女が

いまや快樂刹那主義である、

はっきり言おう

宝石時代とは乖離している! (宝石時代=怒りの日原作)

もはや宝石ではなくただの金髪色ボケ脳天気娘である (誤字にあ  
らず)

いや脳天気なのは変わってないかもしれないが (オイ)

だが

それでも彼女・マリィは藤井蓮の相棒であり

この俺の半身であり

なによりも大切な宝石だったのだ。

故に俺こと藤井蓮は

彼女の願いを聞き届けなければならないのである。

「ハア・・・仕方ない、行きますかね剣道場」

クラスメイトのサンバルカンが投書をしていたのはすでに知っている  
不知火が言っていたからだ

「さて・・・黒神めだが、俺にどんな軌跡を見せてくれるのやら」

『なんだかんだ言って、ツアラトウストラだって見たいんじゃない・  
・・・』

うつせえ、いきなり話しかけるなアホ娘

『なっ!?!?お、乙女に向かってアホ!?!アホですって!?!この朴念

仁のクセに!』

朴念仁?この俺が?フン、晩年色ポケ女は黙ってる(誤字にあらず)

『晩年!?ちよ、ふざけんなあ!!!!!』

シミシミと思う

この女は誰だ、俺の罪姫マルグリットを返してくれ、神よ

『断る、私の許から我が宝石を略奪したのは君だろう?せいぜい足掻けよ、我が息子』

おめえはお呼びじゃねえんだよ!この変態マゾ!

さて

バカな脳内論争は終わらせて

行きますか、剣道場。

それに

本当に俺の友になれるのか試験もしないとね

題名「藤井蓮の人間試験」みたいな

語呂悪いなオイ・・・

S i d e 人吉善吉

そこはまるで廃墟のようだった

散乱する酒瓶、うち捨てられた備品  
まあ墮落したすえた臭いがしないだけまだマシではあるが

む？

これがマシと思える俺はもうすでに手遅れだったりしないか？

ま、まあいい

そんなこんなで俺は例によって新生徒会長ことコイツに巻き込まれ

た訳なのだが

まあなにもする事はないだろう

「例によっていつもどおりだろうな・・・」

コイツの説教、コイツの矯正、めだかちゃんの人生

それらを受けて改心しないやつなどそれこそ化け物くらいだ

「あ？誰だアお前ら」

例によって典型的な不良の模範解答をした金髪のガラの悪い先輩に

「一年十三組生徒会執行部長職、黒神めだかだ」

例によって凜とした声で堂々と名乗りをあげるコイツ

「あー聞いてんぜ、今をときめくイカれた新会長ってヤツだろ？」

先輩は立ち上がりながら木刀を手にし

ヒュッ

めだかちゃんに突きつける

少しかけスイッチが入ったのがわかる



コイツがコレくらいの不良達に負けるような奴じゃねえことは知っているが

なんだ？

俺は何故いま警戒のレベルを上げた……？

何かに見られているような

クビを凝視されているような

俺が反応したのはおそらくは殺気

とても小さく微弱で普通ならば反応しない程度だったが

その殺気の鋭さが問題だった

まるで斬首台に掛けられているかのように錯覚してしまうほどの鋭さ

だが、微弱故にめだかちゃんは気づかない

だが、めだかちゃんをあらゆる過負荷マイナスから守ると誓った俺がめだかちゃんへの殺気に気づかないはずがない！

「チツ……わがままも言ってられねえか」

このような事態になつては仕方ない

あんな一瞬で死を連想させるような殺気を持ち主にめだかちゃんが狙われているかもしれない時に『拗ねていたから守れませんでした』

ではあの人に示しがつかないし、なにより俺が嫌だから！

俺はすぐさま走り出す

もしかしたら俺の早合点かもしれないがああ殺気は尋常ではない

故に - - 疾走

「あ？なん」

よくわからないといった様子で呆けている先輩

「ん？どうした善、！？」

数瞬遅れて俺の様子がおかしいことに気づき連鎖的に自分が狙われていることに気づくめだかちゃん

だが

遅かった

襲撃者は姿を現しその腕 - - もはや人が出せるスピードではない

その腕をめだかちゃんのクビに向けて - -

「さ、せるかあー！！」

間一髪で襲撃者とめだかちゃんの間に入り込む

これで守れる

彼女を - -

ああ、悲しい

もっと君を守ってやりたかったよ

「ごめんね、めだかちゃん」

そう自然と辞世の言葉が出てきたところで

気づく

あれ？俺はなんでそんな言葉を言えた？

あのスピードではそんなことは叶わない

可能ならば襲撃者の足を払いその腕をあらぬ方向へ飛ばしたかったが  
そんなチャチな攻撃ではなかった

故に文字通りこの身を盾にしたのだが

「・・・まったく、流石だな善吉」

そんな言葉で俺は現実に戻る

「流石としか言いようがない、あの絶殺の攻撃を防げるであろう一瞬のタイミングを見つけ、そこに迷いなく突っ込んでいけるその精神力

そしてなによりあの状況で俺自身を止めようとせず自らを間に挟

み自らの身を盾にするという選択を取ったその判断力」

襲撃者は俺への称賛をしはじめた

意味がわからない

ついさっきまで死を覚悟していたというのにその死をつれてきた死  
神に称賛されるなんて

いくら俺でも経験したことがない(当たり前だが)

「よし、認めようとも人吉善吉」

襲撃者は称賛を止め俺へ言う

「お前は俺の友として合格だ」

そんな恥ずかしい台詞を真顔で言ってきた襲撃者

藤井蓮はやっぱり完成されいて

その台詞に

俺は放心して

その仕草に

俺は見惚れていて

だから止められなかったのだろう

「貴様アアアアアアアアアアア!!!!!!!!!」

ああ、そんなに怒らないでいいよめだかちゃん

そいつ、俺の友達なんだ

S i d e e n d

## 第二話「乱神」

推薦BGM Dies Iraeより「Holocaust」

Side 藤井蓮

「貴様アアアアアアアアアアアア!!!!!!!!!」

おそらく善吉が殺されかけたのを理性で理解し

本能のままにいわばキレたのだろう、

一瞬で髪が銀に染まった黒神めだが

俺に向かって突進してくる。

目前に迫る拳を

右の掌ではじき受け流す

そしてがらあきの胴体に左の掌を

「セアッ!」

打ち込む、

「グッ  
！」

自らの勢いと俺の掌の威力があわさり飛んでいく黒神めだか

そこへ

「シッ  
」

体全体を捻りながら疾駆

その円の力をもって

「喰らいな、黒神」

右足に収束させ腰をひねり回転をさらに加え

「螺旋、脚」

後ろ回し蹴りの要領で追撃

「グッ！？カハッ！」

そしてすぐさま飛び退く



剣道場の壁をぶち抜きまだ汚い室内の砂が舞う

砂ぼこりでよくわからないが

これでおそらくは止まるはず・・・

だが警戒のレベルは下げない

いくらなんでも聖遺物の加護である”活動”すら行使していないのだから死にはしないとは思っただが

「め、めだかちゃん・・・」

と

ここまでできてようやく俺は善吉に意識を向ける

「そ、んなに怒らなくていいよ、そいつ俺の友達だからさ」

善吉に怪我はさせていないのだがなぜかフラフラしている

「？おまえどうしてそんなにフラフラなんだ？」

と俺が聞くと

「死ぬかと思っただけ腰抜けちゃったんだよ！アホ！」

あ

そうだった

一応殺す気でやったんだっただけ……

「すまんすまん」

俺は苦笑しながら善吉に肩をかす

「!?!? な、なにしてるんだ!?!?」

「ん? 友達なんだから助けるのは当たり前だろ?」

よくわからないことを聞いてくるので俺は至極当然のことを答える

「!?!?!? そうか、そうだよな」

「?」

よくわからないが一人納得する善吉

「友達を助けるのに、理由はいらんよな」

「? 当たり前だろう」

そんな当たり前前のごとがどうしたというのだろう

「なら、助けなくちゃ……な」

そういつて

善吉は

砂ぼこりをその身で斬りながら疾走してくる黒神と

俺の間にはいりこみ

「落ち着け！めだかちゃん！」

黒神に呼びかける

おそらくこいつは黒神を助けようとしたのだろう

確かに俺は善吉しか認めてないととられる発言をしたが

「ッ！」

まずい

まずい

まずい

黒神は止まらない

あいつはいま人間の限界を超えたスピードを出している

おそらく俺のレベルに合わせたのだろう

たしかに俺ならば死なない

奴のことだから俺を殺さぬようにしているのだろうか

善吉では死んでしまっ

させるかあっ！！！！

「形成　！」

そして

おれはギロチンをもって

黒神めだかを止めたのだ

ギロチンにて斬首するのではなく

ギロチンの腹に突撃させて

ゴンッ！

間抜けな音が響く

「うつ・・・」

ドサッ

黒神が気絶する

そりゃそうだあのスピードで金属にぶち当たれば普通は死ぬが流石は黒神めだか

額に超合金でもいれているのだろうか

気絶ですませるとは

「め、めだかちゃん！」

俺の腕の異常よりも黒神が気になるようすで

善吉はすぐにかげよる

「安心しろ、気絶しただけだ」

黒神めだかのことは善吉にまかせよう

さて

「先輩方？今日ここで見たことはお忘れに」

腰が抜けその顔を恐怖に染めた先輩達に言う

「あ、あ……」

皆が俺を恐れている

ああ

懐かしいなこの感覚は

ちょうど俺が荒れていたころの

「世の中にはね、人の常識で計れない化け物も存在するのですよ」

というところで

さよつな「お、お前藤井蓮か!？」

ん？

「え!?!あの藤井蓮なのか!?!」

「このへんの暴走族およびヤクザ達を暴力で纏め上げたと有名なあの!?!」

「な、なんだってー!?!」

あちゃー……

おれの黒歴史が……

『自業自得だよねー?』

うっせえよアホ

『だからアホ言うな!!』

「あー……まあ一応、藤井蓮だが」

俺がそういうと先輩達は沸き立ち

「あの伝説が……目の前に!!」

待て、お前らさっきまで俺に恐怖してただろうが!

恐怖が畏怖に変わるのによくあることではあるが……

このギロチンを目にしてなにか思うことはないのだろうか

「へ?ギロチン?」

そこでこいつらはようやく俺の腕に目をやった

まさかいままで気づいてなかったのか!?

だがそれを見て

「お……」

俺はまた恐怖されるんだろうかと辟易しながら待ったのだが

「おおおおおおお！？かつこいい！……！！……！！」

ちょっとマテ、そうじゃねえだろう！？

いや、たしかに俺も最初はかつこいい……！！……！！とか思ったけどこれ怖いだろ！？中二だぞ！？これ！

「なんなんだよお前ら……！！……！！」

そんな風にてんわやんわな俺たちだった

Side 善吉

後ろのほうがなんだか騒がしいが無視する



「めだかちゃん！しっかりしろ！」

蓮はああ言っていたが普通あの速度であんなものにぶちあたったら死ぬだろ

いやまあ、こいつが普通じゃないことは俺が一番知っているのだが・

「ん……？」

「めだかちゃん！」

めだかちゃんの目が開く

ああ、よかった

「……善吉」

めだかちゃんは微笑みながら俺の名を呼ぶ

「？なんだ？めだかちゃん？」

「めだかちゃんって呼んでくれたな」

！

「少し……寂しかったんだから……」

こ、ここでシンデレ発動!?

や、やばい可愛すぎる!!--!

「それに死んじゃった・・・か・・・と」

あ、やばい

「善吉が・・・善吉が・・・死」

「俺はここにいる!めだかちゃん!死んでないから!つか勝手に殺すな!」

また乱神モードにはいつちまう!

あ

ちなみに乱神モードつうのはめだかちゃんの真骨頂その4で激昂して暴走していわば理性のタガをはずすリミッター解除のようなものである

ってそんなこと言ってる場合じゃない!

「あいつは俺の友達だから!大丈夫!」

まあなんであんなことをしたのか後でキツカリポツキリ聞かなくちゃならないが今はめだかちゃんを抑えることを優先しなければ

「ん?善吉の友達なのか?」

なんか一瞬で回復するめだかちゃん

「へ？そうだけど？」

「なんだ、なら大丈夫か」

へ？

なにが大丈夫なんだ？

「ん？だって善吉の友達が善吉を傷つけるはずがないだろう」

・・・

俺最近思うんだが

友達ってそんなにすごい奴だったっけ？

「「そいつのためなら死ぬる、そういうのが友達だろう」」

きしくもめだかちゃんと蓮の台詞がかぶる

「ん？ああ、よろしくな黒神、俺の名前は藤井蓮」

「む？ああすまない、私は黒神めだかだ、よろしくたのむ藤井同級生」

「善吉にも言っただが・・・俺は苗字で呼ばれるのは慣れてない、だから蓮と呼んでくれ」

「む？それはすまない、では蓮私のことはめだかと呼ぶがいい」

「そつか？ならこれからよろしくな、めだか」

「うむ、よろしくしよう、蓮」

いぢ

ちよつとマテ

「なんでお前らはそんなに仲良さげなんだよ!？」

「む？」

「ん？」

そこで二人は俺に不思議そうな顔を向けて

「「友達の友達は友達だろう」「」

ああ・・・

やっぱりお前らカツコイイよ・・・

## 幕間「藤井蓮」

さて

ここらへんで我らが主人公である藤井蓮のお話をしよう

彼はその昔極々普通の成人だった

そして極々普通の生活をして

極々普通の友人を持っていた。

そんな彼の思想は

” 死を想え”

奇しくも彼の思想はかの黄金と同じだったのだ

そして彼の趣味は物語を読み知識を蓄えあらゆる未知を網羅すること

ありとあらゆるカテゴリに手を出していた彼が世間一般には忌避されがちアダルトゲームであるうと手を出すのは明白だった

そしてその中でもっとも彼の心に楔を打ったのが

そう

D i e s i r a e というゲームだった

主人公は普通の学生

そこに宗教、戯曲などの要素が織り込まれた敵たちが襲撃し

そして 現れる最強無頼の黄金の王

彼は心奪われると同時に

主人公に嫉妬した

” ああ、自分もこんな人間と殺し合いをしてみたい ”

それは普段の彼からすれば異常な思考であった

だが彼は物語を読むときその世界に入り込むクセがあった

故に同じ物語を二回も三回も読むことはなかったし世の中には自分の知らない未知に溢れていたため同じものを見ようとはおもわなかった。

そして

彼は死ぬ

そうした後彼は自らにとって最大の未知であった死後の世界を知る

暗い闇

暗い自分

そして水平線のような輪が存在する空間だった

そこで彼は想ったのだ

”水平線の向こうはなんなのだろうか”と

そして彼は必死に泳いだ

手は空振りし体の進むスピードは遅かったがなんとかたどり着くと

世界からかどろかにはわからないが質問をされたのだ

”汝、イキタイカ”

その質問はニュアンスが掴めなかった

生きるのか行くのか

だが彼は迷わず答えたのだ

”ああ、そこに未知があるのなら私はどこへでも行く”

”ナラバイケ、ソノタメニ汝ノ願イ壺ツ叶エヨウ”

”承知した”

そして彼は願った

自らが藤井蓮となることを

そうすれば彼と戦い、彼に触れられる

そう想ったのだろう

だが

現実はその簡単にはいかなかった

そうして目が覚めた彼が最初に見たものは

黄金の槍と黄金の



### 第三話「生徒会庶務・生徒会会長補佐」

剣道場から移動した俺たちは現在生徒会室にいる

ちなみに不良たちは

「俺たちを弟子にしてくれ!!!!!!」

やら

「俺たちを扱ってくれ!!!!!!」

だのうるさかったのでその場で

「とりあえずめだかの調教を受けておけ」

と冗談混じりに言ったのだが

「押忍!!!!!!」

となにがなんだかわからないノリになり

「よし!貴様ら今日は歩いて帰れるとおもつなよ!!!!!!」

と、そこにめだかが便乗

一時間弱のめだかによる調教によりあいっらはダウンした

そんなこんなで俺たちは移動し生徒会室にいるのだが

「で・・・アレはなんなんだ？蓮」

と

当然来るとはおもっていた質問がきた

「うむ、私も非常に気になるな

激突した感想を言わしてもらえばまるで金属の塊にぶつかった感じがした」

めだかも流石に気になるのか善吉の質問に合わせてくる

「んー・・・お前ら聖遺物って知ってるか？」

「ん？」「ああ、知ってるぞ」

おお、流石黒神めだか

天才少女である

「俺のアレはそれだ」

「え？なに？」

「ふむ、一体なにをどうしたら聖遺物があんなものに？」

「そうだな、まずは俺のコレと一般的に言われている聖遺物の違いから説明しよう」

「おい」

「む、あれは一般の聖遺物とは違うのか・・・まあ当たり前か」

「まず俺の聖遺物は・・・」

「おい！！！！人を無視して話を進めるな！！」

「「へ？」」

あ、気づかなかった

俺達はそこで善吉が聖遺物なるものを知らないことに気がついた

それもそのはずめだかにとって聖遺物とは普通に知って当然の知識だし

俺にとって聖遺物とは日常的に触れているものである

故に知らないとはおもわなかったのだ

「んーとだな簡単に言うただぞ？」

仕方ないので一般の聖遺物から説明する

「聖遺物つてのはキリスト教に関連する聖人たちの血を浴びたとか遺体を包んだとかまあそういう遺物の事だ

これらは有名なものから言えばイエス・キリストを磔にした聖十字架、手足を打ち付けた聖釘そしてイエスを貫いた聖槍ロンギヌス

お前も名前くらい知っているだろ？あのロンギヌスだ

エヴァで使徒を貫いた」

「それは違うだろ」

「おつとすまない、ついネタに走ってしまった」

「ついで危ないネタしてんじゃねえよ！！」

「まあ簡潔に言えば聖人の遺物だ」

「本当に簡潔にまとめたな・・・」

ちなみに遺物は過去生み出された物の内、手にとったり投げたりできるといって動かせるものことである。

「だが俺達が扱う聖遺物は違う」

ここからが本題である

「待て、”俺達”ってことは他にもあんなのが出せるやつがいるのか!？」

「いる、俺が所属する組織があつてな?そこにおよそ俺含め十三人ほど」

「十三・・・!？」

そう

この世界には俺以外にも魔人が存在した

第一位から第十二位までが普通に極当たり前であるかのように

だがそこに水銀は存在していなかった

単純明快である

水銀の役割を果たすべきは俺だったのだから

「まあそれはおいといて大丈夫だ、さて説明に戻るが・・・」

俺は善吉に目をやる

「・・・ああ、大丈夫だ」

よし

「さて話をもどすぞ、俺達が扱う聖遺物はな？」

人間の思念を吸収することにより自らの意思を持ち、絶大な力を持つようになった”存在”

例をあげるならば人々に恐れられ畏怖されたかのヴラド公の血液や自身の美貌を保つため数多の女を拷問にかけたと云われているエリザベート・バートリーがその拷問の方法を獄中で記した日記など

多岐に渡り存在する」

「なんと・・・そのような物が存在するとは・・・」

めだかが驚愕している

・・・目を開け口を開けと女らしくない顔をしているのにいまだにその美を放つめだかは本当に美しいとおもっ

実にマレウス好みだろう。

「・・・まあ、わかったよ

実際この目で見ちまったしよ

ありゃあ、この世にあつちやいけねえ物って事はよくわかった」

流石は善吉

めだかに気を取られていたのにそこまで感じ取るか  
だが

「?それは違つぞ善吉

アレは別に存在することが罪ではない

アレを扱う人間こそこの世にあつてはならぬ物なのだ

アレは恐らくその聖遺物とやらを武装化し具現化したものなのだから?  
う?」

「ああ、あれは形成つて言つて俺の心の奥底に眠る闘争本能の具現化したようなものだ」

まあ俺の認識ではだが

「うむ、いわばアレは人間の見てはならない部分を見えるようにしたようなものだ

だからこそ

人間のカテゴリーに属する私達では見てはいられない

自身の奥底に眠る醜い衝動をそのまま具現化したようなものだから  
な」

流石はめだかである

よくそこまで理解できるとは・・・

まさか・・・

「あー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！訳わかんねえよ！

要するによ？蓮は腕をギロチンに変えられて

そんなことができる奴が他にも蓮の仲間にいるってことだろ！？」

おいおい・・・

たしかにそうだけどお前それははしよりすぎだろ

「なら何も問題ねえだろ？そうだろ、めだかちゃん？」

「うむ、蓮の仲間なら問題ないだろう」

「いや、俺が言いたいのはそのうことじゃねえんだけど・・・  
まあいいか・・・」

ん？まあたしかにあの連中は問題だらけだが  
めだかがそういつならいいだろう

「まあっーわけですよ？善吉、めだか」

「ん？なんだ蓮」

流石は幼馴染



息がぴったりである

「「・・・」」

二人して照れてやがる・・・

「これからよろしくな？」

俺がそういうと

「「ああ！よろしくな、蓮！」」

と今度こそ八もらないよう大きな声にしてみたようだが案の定八モりまた照れている幼馴染達であった。

**登場人物 + (前書き)**

感想にてご指摘があったので設定を追加いたします

## 登場人物+

藤井 蓮

本作の主人公及び箱庭学園第98代生徒会会長補佐

三年前に舞台である箱庭学園のある町に定住

そして黒神めだからと同学年で入学した。

現実世界からの転生者で前世は極普通の社会人だった

平凡、普通というものが大好きで異常、異端が大嫌いだが

自らの友人は大切にす

最初黒神めだかを自身の日常を破壊するものとして嫌っていたが  
人吉善吉を友と認めただけで彼が守ろうとする黒神めだかに興味をも  
った

原作と違い刀剣類は苦手どころか好きになったい

趣味は読書

原作では敵対していた”聖槍十三騎士団”に所属している

扱える業

詳しくは原作を購入しプレイすることをお勧めするが簡単に紹介

・ Eine Faust Ouverture (美麗刹那・序曲)  
藤井蓮の創造・求道型(聖遺物参照)

彼の渴望である「刹那を永遠へ」を汲んだ創造  
能力は体感時間の停滞および自身の超加速

これを使うと自らの体感時間が停滞する

いわば周囲の状況の知覚のスピードが上がる

例をあげるならば飛んでくる銃弾をスローで見れるなど

だが体感時間の停滞だけでは自身も停滞してしまうため自身の超加速すら可能になった。

・ Eine Faust Finale (涅槃寂静・終曲)

藤井蓮の創造・霸道型(聖遺物参照)

上記の美麗刹那・序曲の完成型で体感時間の停滞、自身の超加速

そして自身の停滞を視認可能な範囲の全域に強制する

つまり藤井蓮が加速すれば加速するほど彼自身が停滞するためその  
負荷を視認可能な範囲全域に強制するという凶悪にして絶対的な能力

なおこの創造を行使すると髪は赤く、肌は褐色と非常に禍々しい容  
姿に変貌し、ギロチンの刃が背中から羽根の様に数十条にも及び発  
現する。

・???????

不明

マリイ

本作のヒロイン

三年前に相棒である藤井蓮と共に箱庭学園のある町に来訪

その正体は藤井蓮の聖遺物でありかつて大量の罪人達を処刑してきたギロチン、罪姫・正義の柱。マルグリット・ボワ・ジュステイスそしてそのギロチンに宿りし魂マルグリット・ブルイユ

断頭台の下に生まれ、人に触れると問答無用で首を刎ねる呪いを帯びていた。そのため周囲の人間に忌避され、誰にも深くかわるることが無く処刑されその人生を終えたがギロチンに宿り世界からはじきだされた穴 特異点で永遠を過ごしていた

原作では金髪癒し系脳天気電波娘だったが本作では金髪色ボケ脳天気娘であり藤井蓮を落ち込ませている。

なお藤井蓮が転生して間もないころは無口の機械のような少女だったらしい

趣味は藤井蓮をいじめること・いじめられること

よくも悪くも彼女の世界は藤井蓮でできており彼女は藤井蓮の相棒であり姉であり妹であり娘でもある。

黒神めだか

今年度入学生及び箱庭学園第98代生徒会長

1年13組所属の特待生。学力、スポーツ、芸術など多方面に際立った能力の持ち主で容姿端麗、家は世界経済を担う大金持ちと全てにおいて恵まれた「完全」な女の子であり「見知らぬ他人のために生まれてきた」という思想を信条に、学園の誰からの相談でも24時間365日受け付けることを有言実行している。

目的解決に必要なせは自らが傷を負うことを厭わないが、決して自己犠牲主義ではなく、状況によっては自分が一番目立たないと気が済まない子供染みた部分もありまた妙なところで一般常識に疎く、目的に対する方法・手段も極端。桁外れの能力値のせいで、本人は大の動物好きでありながら、動物には本能的に避けられてしまうと言つ性質を抱えている。

半ば露出狂の気があり、他人の前で着替えることや肌を露出することに抵抗がないので藤井蓮からは「変態」の異名を与えられる。

彼女の異常性（異常参照）は「完成」<sup>ツ・エンド</sup>

他人の異常性および才能を本来の持ち主異常に使いこなし完成させてしまう能力

問答無用で相手の上に行く能力だが聖遺物は所持してないため藤井蓮には敵わない

なお出典はほとんどwikipediaだが許してほしい。

人吉善吉

黒神めだかの幼馴染兼箱庭学園第98代生徒会庶務

いわゆる普通の男の子

一年一組所属の普通の男子で黒神めだかとは二歳のころからの幼馴染

黒神めだかの正しさを信じており信頼と好意を寄せるがたまにちょっと離れたりしてみるいわゆる”ツンデレ”

はじめは生徒会に乗り気でなかったが藤井蓮の登場により生徒会にいらなくて黒神めだかを守れないと痛感し生徒会に入会した。

黒神めだかに付き添うために幼いころから努力を続けているためその肉体と精神は非常に練磨されておりまさしく努力の天才である

故に藤井蓮から「人類最高」の異名を与えられる

彼は普通の男子のため異常性はないが強いて言うならば

一人の女性を信じ愛し続けその女性を守るために努力を怠らないいわば「努力」の天才と言えよう。

ちなみに作者は彼が大好きです。

以下設定

## 聖遺物

一般的な聖遺物とは異なり人の怨念や畏怖、血を浴びたものになる意思をもっておりみずから扱うものを自ら選別する

簡単にいえば意思をもった武器、選定の剣カリバーンみたいな

聖遺物は血を吸い魂を吸収することにその使徒は装甲及び攻撃力が強化されていくため聖遺物の使徒は同じ使徒でなければ倒せないとされさらに発動には魂が必要なため人を殺し続ける必要があり経験を重ねれば重ねるほど隙がなくなっていくいわば最高の循環をする。

また喰らった魂（殺した人間）の数に相当する生命力を得るため仮に傷ついたとしても回復することができる。

聖遺物の使徒は聖遺物の加護ある限り不老不死だが基本聖遺物が破壊されるとその使徒も死亡する。

また位階というものが存在し経験を重ねることにより位階は変化し、戦闘能力も飛躍的に増大する。位階が一つ違えば、その戦闘力は桁違いになる

## 第一位階・活動

### 初期の段階

限定的に聖遺物の特性を使用することができが聖遺物に振り回されいわば力を扱いきれてない段階なので暴走しやすい。



## 第二位階・形成

聖遺物を具現化できる。聖遺物の使い手の基本形態。五感・靈感が超人化し、破壊と戦闘を高次元で行えるようになる。高密度の魂を取り込んだ場合、それを具現化させることも出来る。

## 第三位階・創造

切り札、必殺技を獲得する段階。使い手の魂に刻まれた渴望をルールにした、己と己の聖遺物にとってのみ都合のいい異界を創り出す。この位階に達した者のほとんどは聖遺物の形状が大きく変化する。大きく分けて「霸道型」と「求道型」がある

### ・霸道型

術者の周囲の空間を異界に変異させる。他者を食い潰して広げる道であり、主に「〜であったらいいのに」という思いが元にある。一対多の戦闘に向いている。しかし自らの世界に他者を取り込むことに世界の否定因子が増えるため、多くの人間や、異常者や騎士団クルスの強大な魂を有する者を取り込むほど効果が薄まっていく。許容量は術者の力量によって異なるが、基本的には、並の人間程度ならば数百〜数千を取り込もうと問題はない。

### ・求道型

術者自身を異界として肉體変化や特殊能力を付加させる。自分一人で突き詰めていく道であり、主に「〜になりたい」という思いが元にある。一対一の戦闘に向いている。自己完結しているため効果が強く破られにくい。また他者を取り込まないため、他者に影響されずにその効果を発揮できる。しかし能力によっては、術者自身の精神状態によって効果が変動するものもある

#### 第四位階・流出

最上位階。創造の異界とそのルールを永続的かつ全世界に流れ出させ、既存の世界法則を塗り替える。

ただし求道型の流出は、術者自身が世界の理から外れた完全永遠の存在となるだけで、他に一切影響を及ぼさないため、真の意味での流出には達せない。

また聖遺物には四種の武装形態に分類される

##### ・人器融合型

肉体を聖遺物と融合させる。攻撃力に特化し、全タイプ中最高の身体能力を発揮する。しかし聖遺物との同調率が高くなるほど極度の興奮状態となつていき、理性的に判断することが困難になる。そのため、爆発力は高い反面、格下から足元をすくわれ易いタイプでもある。性格としては好戦的で破壊的な者、刹那主義者や享楽主義者などがなりやすい。聖遺物は、拷問や処刑に使用され、怨念を餌にした物が大半。藤井蓮はこのタイプ

##### ・武装具現型

聖遺物を刀剣などの武器として扱う。基本形でありバランス面で優れ、特筆すべきメリットもデメリットもない。突出した点も穴もない特性上、実力以上の力は発揮できないため、未熟な者は決定力のない器用貧乏だが、強い者は万能となり隙がなくなる。主従関係がはっきりしているため暴走・自滅の危険性が低い。性格としては職業的な戦闘訓練を受けた者、現実主義者などがなりやすい。聖遺物は、武器・兵器などの戦闘における道具として使用され、血を吸った物が大半。人吉善吉は恐らくこの形態になる

##### ・事象展開型

魔術や呪術のような働きをする。物理的破壊の顕現ではないため攻撃力は低く、中には攻撃力が皆無の者もいるが、反面防御や補助に優れており、殺すことが困難。融合型と組んだ場合は非常に危険。性格としては理知的で聡明な者、探究心と神経質な拘りを持つ者など、学者・芸術家タイプの者がなりやすい。聖遺物は、書物や芸術品など、作者の狂的な情熱を餌にした物が大半。

#### ・特殊発現型

上記のいずれにも属さないか、または複数の性質を持つ。他を上回る強大な力を発揮することもあれば、状況次第では全く役に立たないこともあるなど、非常に不安定なタイプ。性格としては特定の物事や人物に囚われて盲目的になっている者、純度の高い宗教家や復讐者がなりやすい。聖遺物は、質の浄不浄に関係なく、信仰を餌にした物が大半。

#### ・アブノーマル 異常

簡潔に言えば他人より優れている者たちの内さらに優れすぎているまたはある一つの事が特化しすぎている者達の才能のこと

例をあげるならば異常なまでの反射神経など

すなわち異常とは普通であるものが異常なまでに発達することと作者は考えているため本作では

簡単に能力と書いていただいて差し支えない



第四話「警告・蜘蛛の巣」(前書き)

不知火理事長に釘を刺しに現れる騎士団員  
もちろん藤井蓮からの指示です

現れるのはもちろん!!

## 第四話「警告・蜘蛛の巣」

Side 不知火 袴

「フフフ・・・」

なんという、なんという僥倖！

まさか新年の生徒にまだ頭角を現していなかった”異常”が存在するとは！！

私は彼 藤井 蓮を思い浮かべる

あの完璧な容姿

完璧な経歴

そして あの”異常”な腕！！！！

カメラからしか見えてはいなかったがそれでもわかるあの存在感！！

ああ、彼を我らフラスコ計画に招けば計画は大きな前進を遂げるはず！！！！

そう、一人歓喜していたとき

コンコン

無粋なノックの音

「む……？入りなさい」

まったく、この至高のひと時を邪魔するなんて

”十三人”の誰かだろうか

しかし

ガチャ

ん……？名乗りを上げない……？

おかしい

なにかがおかしい

だがそう思ったのも遅かった

「失礼、貴方が箱庭学園理事長及びフラスコ計画責任者、不知火袴殿ですな？」

ゾクリ

瞬間

身の毛もよだつ悪寒に襲われる

「ッ！」

声も出ない

なんという、圧力が

まるで幾百幾千の人間から殺気を浴びせられるかのようなこの威圧

だが

すぐに私は立ち直る

この身は”不知火”

その私が威圧されっぱなしでは、立つ瀬がない

「・・・いかにも、私が箱庭学園理事長、不知火袴である



して、お前は何者か」

フラスコ計画の責任者ということをや遠まわしに否定しておく

あの計画は軍及び一部の投資家しか知らぬもの

肯定はできない

「ふむ……ワタクシの威圧を受けてなおその啖呵

なるほど、あなたはツアラトウストラに警戒されるわけですね、

失礼、私はシュピーネ、聖槍十三騎士団黒円卓の騎士、十六夜所属  
紅蜘蛛のシュピーネです」

その、不気味に長い手足と飛び出すような眼

容姿は悪く、また纏う雰囲気すら腐臭を撒き散らすその男は

自身を”蜘蛛”だと言った

待て

こいつ

「聖槍……十三騎士団　　!？」

聖槍十三騎士団

かつての第三帝国・ドイツより発足し

数多の人間を殺し

数多の闘争を引き起こし

数多の内紛に介入してきたといわれている伝説の魔人集団　　！

そしてその中でも抜きん出た実力、才能の持ち主達がいるとされる

黒円卓の騎士　　！

数年前ある一人の男が学園に侵入してきた

すぐに我々が取り押さえたがその男は妙にあせりそして発狂していた

「た、助けてくれ！あ、あの方が・・・あの方が！！

死を、死を司るあの方が　　！！

黒騎士が！！！！

あ・・・」

その男はそこで息絶えた

息、絶えたのだ

私はその瞬間愕然としたのを覚えている

”今、この男が死ぬ原因は存在したのか”

そう、彼はぷつりと糸が切れるように死んだのだ

まるで幕を落とされた劇のように

そして

”下らん、その程度の覚悟で死を冒涇するとは、恥を知れ”

重い、重い、何かによって

私の意識は落とされた

そのものが発狂する寸前に聞き出せたことは三つ

一つ、聖槍十三騎士団

二つ、黒田卓

そして

三つ目に

「お主が・・・赤騎士・・・？」

そう

究極の才能、能力が集まる黒円卓における五つの幹部席

第一位、首領 黄金の獣

第十三位、副首領 水銀の王

第十二位 大隊長 狂乱の白騎士

第七位 大隊長 鋼鉄の黒騎士

第九位 大隊長 紅蓮の赤騎士

他の騎士団員がどれほどのものかはわからない

だが

この者は紅蜘蛛といった

ならば、と

赤騎士の可能性を考えたのだが

「!?わ、私が赤騎士!?

ああ・・・!!!

なんとこの恐ろしいことを言うのですか貴方は!!

私がザミエル卿の席に・・・!?

ありえない、消し炭にされてしまう!

私はただの団員ですよ

それも戦闘員では最弱です」

これで、最弱

これで、この威圧感で最弱 ?

「なんだと・・・?」

思わず聞き返してしまう

「ですから私はただの団員

あんなお方と一緒にしないでください!

ああ、こんなことはどうでもいいです

用件を告げましょう」

もつと情報を引き出せたかもしれないが彼 シュピーネは話を終わらせたいようだった

「我々聖槍十三騎士団の副首領である、ツアラトウストラからの警告です

”ただちにフラスコ計画を中止せよ、さもなければ我が水銀が汝らを侵す”

おわかりですか？あの、あのお方がお怒りなのです

世にも恐ろしい超越者、斬首の執行者

副首領、メルクリウス・ツアラトウストラ閣下がお怒りなのです

「！」

「」

絶句

この恐ろしい威圧をもった男が最弱の集団の副首領からの、警告

それが、どれほど恐ろしいことかはこの男の怯えようからわかった

わかって、しまった

すぐさまフランスコ計画を中止しなければ、我々は抹殺される、と

だが

「それは・・・出来ぬ」

そう

出来ぬのだ

もう既に我々は何百何千何万もの命を、殺してしまっている

そんな我々が止まれるはずがない

彼らに報いるため

そして”通常”である全ての人間のために

我々は　私は止まらない！！

あの苦汁、あの絶望を

これから先生まれてくる全ての子供達に味合わせたくない！！！！

「すまんが、お帰り願おう、シユピーネ殿

ツアラトウストラ殿にはこう伝えておいていただきたい

”我々は止まれぬ”と

そう、もう・・・止まれぬのだ

「・・・

よいのですね、不知火袴殿

私は関与しません

おそらく、マレウス　魔女の鉄槌がお出でになるでしょう

その時が貴方の最期です」

そういつて彼は部屋を後にした

「・・・もう、止まれぬのだ」

敬愛する父も祖父も皆すべからくフラスコ計画に身を投じ

そして　愛する母も、計画により死んでしまった



「もう・・・止まらない

そうであろう、襟エリ」

今はもういない妻の名を呟く

かつて若いとき

どうしようもなくどうしようもなかった私について来てくれた唯一の女性だった

”エリー”

そう、愛しい彼女の愛称を甘く囁き

すごした夜

だが、そんな彼女も計画の犠牲になった

犠牲に、したのだ

故に

「私は 止まらん!!!!」

宣言しようぞ、騎士団

私は、いかなる暴力にも、圧力にも、警告にも!

屈せず計画を完遂させると!

たかだか60年程度の歴史しか持たぬ貴様らに!

我が”不知火”を、舐めるな!!」

これでいい

恐らく聞いていたはず

だから

「貴様らには屈せぬ !!!!!」

”ああ、なんとという魂の輝きか”

声が、聞こえた

” 良い、よいぞ御老体、その魂からの叫び”

我等が王が聞き届けた

” その覚悟ならば、あるいは私を斃せるやもしれん”

もう私は飽いているのだ

” その怒りが終末を招いたとしても”

歓迎しよう、不知火袴

” これより、戦争を開幕する”

S i d e E n d

#### 第四話「警告・蜘蛛の巣」(後書き)

はい、我等が形成(笑)さん登場ですw

まあ本編の話をするならばここから本格的に

騎士団VS学園

といったところでしょうか

とはいえ

普通にやったら学園に勝ち目はないので騎士団は制限されます、ハイ

または学園側を強化するしかないかなあ・・・

## 第五話「紅蜘蛛のカラクリ」

シュピーネは箱庭学園の中を音もなくあるいていた

思考するのは先ほどの老人のこと、そしてその血縁関係

そして、自身の身の安全だった

ああ、世にも恐ろしいあの方の怒りを買うとは  
本当に愚かな老人だ、だが

シュピーネは考える、この件が自分の益にはならないか、と

副首領は言っていた

”警告をしてこい”と

ならば、ここで敵の血縁関係の者の一人や二人をさらうのは当然で  
はないだろうか

彼の老人は言った、我々と敵対すると

ならば

「まったくもって愚かですねえ、愚かとしか言いようがない

ならば、我々の恐ろしさを知ってもらわねばなりませんねえ」

ククク、とまるで獲物を見つけた狩人のように、シュピーネは嗤う

たしかあの老人の孫娘がこの学園には在籍していたはず

事前に調べていた情報を頭の中に思い浮かべシュピーネはほくそ笑む

それが彼に破滅をつれてくるとも知らずに

「ん？」「どうした？善吉」

ここは生徒会室だ

中では人吉とめだかが作業をしていたが

人吉がピクリとなにかに気づいたように顔をあげた

「いや、なんつーか・・・」

人吉はうーんと首をかしげながら思索する

そう、なんとというか虫の知らせのようなものを感じたのだ

「虫の知らせって言うのかな、なにか感じた」

なにかが危ない、そんな感じの何かを

そんな人吉の台詞を聞いて、めだかは眼を閉じて言う

「ふむ、ならばいってこい善吉」

え・・・？と声を上げる人吉

「なにかを感じたのだろうか？ならば行って来るといい

蓮も言っていたではないか、直感捨てたものではないと」

たしかに蓮は言っていた

”直感を信じる、直感あらゆる場面を覆す力を持っている”

「故に、行け

ここは私に任せて、な」

ああ 本当に、めだかちゃんは

「ああ、ありがとうな、めだかちゃん」

先ほどから感じるなにかを、知りたくて彼は今必死だった

そうして生徒会室にはめだかが残され

「フフツ・・・やはり、善吉はいい男だ」

ニコニコと一人で微笑んでいて気持ち悪かった

「こっちか？」

善吉は今現在体育館の裏にいた

このあたりから一番なにかを感じたからだ

だが

「・・・なにもない、な」

なんにもない、普通の体育館の裏だった

草木は整えられているし不良達がたむろっているわけでもない

気のせいだったか、と一人ため息をついて善吉はきびすを返しかえろうとしたとき



ふと、気づいた

”何故、体育館から声がしない？”

今の時刻は放課後、普段ならば部活をしている生徒達の声でいっぱいのはず

その事実気が付いたとき、善吉はすぐさま体育館の扉をあける  
そこには

「おや？誰か来るとは思っていました、一般人のようですね」

体育館一面に張り巡らされた、糸

そしてそれに吊り上げられている生徒達

そして 床一面に広がる血の海

ドクン、と善吉の中でなにかが胎動する

”これはヤバイ”

この、捕食場を作り出した主はこの異様に手足の長い、見るものを不快にさせる男だろう

そして、この男はヤバイ、と彼は思ったわけではない

そう、彼は自身の中で胎動するなにかに恐怖を覚えていた

”この光景を見て、なにかが生まれようとしている”

そんな風に彼は思った

つい先日、彼は超常の存在を知った

聖遺物、それを操る魔人たち、そして藤井蓮

そしてそういったモノは同じモノを引き寄せ

そして、聖遺物は持ち主を選ぶのだ

自身をより愛し、自身をより高みへと押し上げ、自身をより愛してくれる者を

そしてなにより聖遺物は血を求める

”血、血、血、血がほしい”

善吉は、歌が聞こえてくるように思えた

”ギロチンに注ごう、飲み物を”

それは、純粹すぎて最早白無垢のような、殺意

”ギロチンの渴きを満たすため”

殺すという悪意が存在せずただただ、殺、という純粹なまでの殺意

”さあ、我が姫君、彼を抱きしめてくれたまえ”

善吉の意識はそこで途絶えた。

第五話「紅蜘蛛のカラクリ」(後書き)

久しぶりの更新です

短くてごめんなさい……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4206n/>

---

天才と凡人と規格外

2011年1月5日19時59分発行